

熊本大学附属図書館(中央館)リニューアルオープン記念

第29回 熊本大学附属図書館貴重資料展

永青文庫資料にたどる

# 物語史と絵

期間 平成25年11月2日(土)～4日(月)

会場 熊本大学附属図書館1階古文書閲覧室

入場無料

公開講演会・第8回永青文庫セミナー

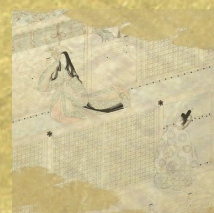
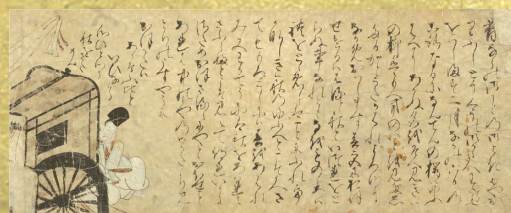
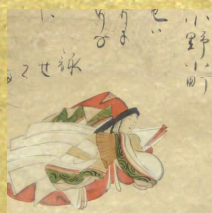
## 物語史と絵

講師 森 正人 (熊本大学社会文化科学研究科教授)

日時 平成25年11月2日(土) 午後2時～3時30分

会場 放送大学熊本学習センター3階大講義室  
(附属図書館隣)

※ 聴講無料





## 展示にあたり

『源氏物語』『絵合』巻、光源氏が後ろ盾となつてゐる梅壺の女御と、権中納言（光源氏の亡き妻・葵の上の兄の娘である弘徽殿（こうきでん）の女御とが、天皇の寵愛を競い合つてゐるさなか、宮中で絵合わせの催しが行われます。それぞれが収集した絵を提出して、その優劣を争うのです。

「絵合」巻には、二番の組み合わせについて双方の批判と弁護の応酬が描かれています。すなわち『竹取物語』に対して『うつほ物語』（としかげ）「俊蔭」巻、『伊勢物語』に対して『正三位』、いずれも物語絵です。梅壺側が出した『竹取物語』は「物語の出来始めの親なる竹取の翁」と称され、絵は巨勢相賀（こせのあふみ）、文字は紀貫之の手に成り、弘徽殿側の「俊蔭」の絵は飛鳥部常則、文字は小野道風と紹介されています。これらの筆者と画家は実在しますが、実際にこのような制作品があつたかどうかは分かりません。それでも、この記事は物語の初期から絵と関係を持っていたことを示しています。

物語と絵の関係の深さはそれ以後も変わることはありません。しかも、たとえば国宝の源氏物語絵巻（徳川黎明会蔵、五島美術館蔵）のように、完成されたすぐれた文学作品を絵画化するとか、あるいは、いわゆる挿絵として絵を本文の間に挟み込んで添えるとか、というところにとどまるものでもありません。物語が絵に描かれ、その絵を見ながら登場人物に身をなして歌を詠んでは、物語に新しい展開を促すこともあ

ります。また、絵が中心となつて展開する類の絵巻において、画中に人物の科白（せりふ）やその場面に關する説明が書き込まれて、物語としてのふくらみが与えられていく場合もあります。

このように絵と物語の文とは相互に助け合い、触発しあうという動的な関係を結んでいるのです。したがって、物語史とは享受と創造とが同時に営まれる歴史であり、その歴史は絵とともにあつたとも言つても言い過ぎではありません。

熊本大学が公益財団法人永青文庫より寄託を受けている資料のなかには、文学史的にも美術史的にも重要な物語の本が多数あります。室町時代から江戸時代前期にかけて制作された奈良絵本と呼ばれる絵入り写本として、とりわけ『いはや物語』（絵巻）、『平家物語』（絵本）などは豪華で美麗な逸品です。本学附属図書館もまた、仲光家文庫をはじめとして貴重な物語の版本や物語の享受資料を蔵しています。これらの資料を用いて、十世紀から十七世紀までの八〇〇年にわたる物語の豊穡な歴史をたどることとします。

＊本目録は、展示資料名、写本・刊本の別、写本の装丁、冊数・巻数、永青文庫の登録番号または永青文庫以外の所蔵者名を記し、解説を加えたものです。

＊展示資料は、おおむね物語の歴史をたどることができるように配列してあります。

1、竹取物語 写本 袋綴 一冊 一〇三・七・四

最初期の作り物語で、「物語の出来始めの親（源氏物語「絵合」巻）と呼ばれる。貧しい竹細工の翁が竹の中から見出した姫の不思議な成長に始まり、五人の貴公子の求婚をことごとく退け、もとの月の都に帰る物語。古伝承の天人女房譚を下敷きに、人間社会への批判を加え、伝奇性と現実味を兼ね備えた作品となっている。絵巻・絵本に仕立てられることも多かったが、当本は文字のみの江戸時代中期頃の書写。

2、伊勢物語 写本

列帖装 三冊

赤二二・三二四

むかし男（在原業平）

の一代記の歌物語の奈良絵本。奈良絵本の制作者は特定できないことが多いが、当本は、

『女百人一首』『女文章

鑑』『女書翰初学抄』な

どの女性教養書の作者でもある居初こはるつなの本

文と絵である。元禄（一

六八八〜一七〇四）年

間に最盛期の活躍を迎

え、宝永頃まで活動し



第九段・八橋

たらしい。伊勢物語本文に、淡色を基調とした絵が適宜添えられる。桜の花びらなどには、いわゆる盛上げの技法（胡粉で型どり、彩色する）が見受けられ、『女書翰初学抄』の序文に諸芸を学んだことを自ら記しているが、書画にも鍛錬したのであろう。

3、大和物語 写本 袋綴 一冊 一〇七・三六・六

歌物語。一〇世紀半ば頃の成立。歌を含む短小な物語一七三段から成る。宇多天皇の退位間近の頃の逸話を第一段に置き、宮廷および貴族社会の風流や恋愛に関する物語に続き、第一四一段より地方を舞台にした伝説風の物語が比較的多く並ぶ。第一四七段は摂津の国を舞台に、二人の男に求婚されて生田川に入水し、男たちも後を追ったという悲話と、これを絵にして宮廷の女性たちが歌を詠んだという、物語享受に関する注目すべき事例。当本は、本文は中院通勝（一五五六―一六一〇年）筆、文禄五（一五九六）年に細川幽斎（一五三四―一六一〇年）が奥書を加えている。

4、住吉物語 刊本 一冊 個人蔵

十世紀末頃に書かれた継子物語。継母の迫害を受ける姫が亡き母の乳母を頼って住吉に逃れ、これを恋い慕う貴公子と再会し、結婚して繁栄する。大斎院選子内親王の周辺で作られたか。はやくから絵と結びついて享受され、三十六歌仙の一人大中臣能宣も関与している。時代の読者にあわせて改作が繰り返され、江戸時代まで長く読み継がれたために、本文の流動が激しい。当本は刊記を持たないが、寛永九（一六三二）年刊行の本と同版後印と見られる。

5、 うつほ物語 刊本 三十冊 一〇三・七・二

一〇世紀末に成立した最初の長編作り物語。主人公の俊蔭の娘とその子の仲忠が、京都北山の杉の木のうちほ（空洞）で暮らすという設定からこのように称される。最初的主人公俊蔭の異国漂流と琴の秘曲修得という伝奇的な物語として出発し、音楽の家の歴史という構想と結びついて、長編への道を歩き始め、貴族社会の現実を描き出す物語として成長していったと見られる。当本は絵入りで、延宝五（一六七七）年刊。

6、 おちくぼ物語 刊本 六冊 二・五・一

一〇〇〇年頃に書かれた継子物語。継母に迫害される姫が高貴な男君を通わせるようになり、父と継母の家を離れて幸いを得るとともに、男君が権力を用いて継母に報復を加えるという物語。上流貴族の世界にとどまらず女房階層の生活感覚に根ざした表現が、作品に現実味を添えている。当本は読本作者であり国学者でもあった上田秋成（一七三四—一八〇九年）が整定した本で、寛政十一（一七九九）年刊。

7、 土佐光起表紙絵源氏物語 写本 列帖装 五十四帖 第参番

表紙・裏表紙絵に御所絵所預であった土佐光起（みつおき一六一七—一六九一年）の署名のある淡彩の色紙絵を貼り、物語の本文を寛永の三筆である松花堂昭乗が書写した贅沢な逸品。光起画は、墨と金泥等による細密な描写が特徴的で父光則以来確立した。表紙絵と本文とが綴じ違いによって、一致し

ていない帖がある。土佐柏の紋を散らした蒔絵簞笥に収められ、嫁入り本として仕立てられたものと推される。

8、 源氏物語 刊本 十七冊 一〇二・四・三

山本春正（一六一〇—一六八二年）の慶安三（一六五〇）年の跋をとまなう絵入り版本。春正は、松永貞徳に源氏物語を学び、六百番歌合の著名な藤原俊成の判詞「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事なり」に影響を受け源氏物語に執心するようになった。挿絵の総数は、二二六箇所である。先行する大和絵の場面選択に倣ったものも見受けられるが、大半は春正が源氏物語を読み込み独自に考えたものという。本文自体はいわゆる混態本文で、春正自身が数本を集め、諸抄を参照して校訂したと記している。源氏物語五十四帖に、別冊附録である「源氏目案」「源氏引歌」「源氏系図」「山路の露」を添える。これらを十七冊に合冊している。

9、 源氏物語 刊本 三十八冊 熊本大学附属図書館蔵

山本春正跋の源氏物語の挿絵に手彩色を施したもの。江戸時代初期に



「葵」巻表紙



は、丹色と緑色を主に用いて、幸若舞、お伽草子、仮名草子に彩色された丹録本が制作されるものの、五十四帖の源氏物語に彩色されたものは他に例を見ない（梗概本の源氏物語にはその例があるようだ）。従って、後代の彩色かと考えられる。丹、緑に加え、黄色、鈍色、茶色、<sup>はなだ</sup>縹色も用いられており丁寧な彩色である。絵入り版本の享受を考える上で、重要な一書であろう。惜しまれることに、別冊附録は全て残るが源氏物語本体に欠巻がある。



「紅葉賀」巻

10、源氏小鏡 刊本 三冊 (仮)一五四

源氏物語の梗概書に絵を添えて刊行したもの。本書は、いわゆる上方版で、「明暦三年〔丁酉〕仲秋吉辰 洛陽三条寺町誓願寺前 安田十兵衛開版」の刊記を伴う。この小鏡に添えられる絵は、土佐派（土佐光吉）の源氏絵

に構図から細部に至るまで一致することが多く、土佐派の絵に接見出来る人物が制作者と推されている。絵の入らない源氏小鏡は嵯峨本として刊行されてきた歴史があることから、上層階級の参与が考えられる。

11、源氏絵 断簡 八枚 熊本大学附属図書館仲光家文庫蔵

源氏物語中のよく知られた場面の絵。全八枚の内訳は「桐壺」高麗の相人の観相の場面、「空蟬」空蟬と軒端萩をかいま見する源氏、「若紫」北山での紫上のかいま見、「紅葉賀」青海波を舞う源氏と頭中将、「花宴」桜の花の宴の後、源氏と朧月夜との邂逅の場面、「賢木」野の宮での六条御息所との別れの場面、「関屋」空蟬一行と源氏との邂逅の場面。もう一場面は、今のところ未確定である。「土佐派源氏絵」と包み紙には記されているものの、細密画を確立した光則、光起などの筆致とは大きく異なる。銀箔を多用するところなどは、装飾的であるが、人物の表情や建造物などは一層の単純化がはかられ、町絵師たちによって手がけられたものと推される。

12、狭衣物語 写本 袋綴 四冊 一〇八・五・四

六条斎院宣旨（源頼国女）作とされる作り物語。白河朝（一〇七二〜一〇八六年）前期の作品か。嵯峨帝の弟堀河関白の一人息子である狭衣大将を主人公とし、従妹源氏の宮や、帝の愛娘女二宮、身分違いの飛鳥井女君、一品宮、有明の君などとの恋愛模様を描く。冒頭「少年の春はおしめどもとゞ



まらぬ物也ければやよひの廿日あまりにもなりぬ」は白居易の「花ヲ踏ンデハ同ジウ惜シム少年ノ春」を下敷きにしたもので、これまでの物語冒頭とは一線を画している。当本は、細川幽斎筆との極書<sup>きわめがき</sup>があるものの書写年次はやや下るようである。

13、 栄花物語 刊本 九冊 一〇三・七・三

宇多天皇から堀河天皇まで、藤原氏でいえば基経から師実までのおよそ二〇〇年の歴史を正編三〇巻、続編一〇巻に物語風に記した歴史物語。大半は赤染衛門の手になり、宮廷女房たちが書き継いだとする説が有力。正編は長元（一〇二八〜三七）年間、続編は寛治六（一〇九二）年以後まもなく成立か。当本は抄出して九冊に仕立て、絵入りで刊行されている。刊記はない。政変、出家・仏事、諸行事に関する記事を中心に抄出されている。

14、 三十六歌仙絵 写本 袋綴 一冊 熊本大学附属図書館仲光家文庫蔵

藤原公任が撰定した三十六人の歌人の絵に代表歌を添え、十八番の歌合としたもの。伝本によって、歌に入れ替わりがある。当本は、絵姿に歌を書き入れた色紙を台紙に貼り、これを一冊に仕立てる。細川家に仕えた仲光正昭が筆を執ったことを伝える仲光永勝の天保十（一八三九）年の識語がある。仲光正昭は、鳥丸光廣<sup>からすま</sup>に歌学を学び、自身に家集も備わる。三十六首中、二十一歌仙の歌が、尊円本と呼ばれる系統に合致するが、どの系統かは断言できない。近世初期の享受の上で、別系統のものと接触し合い独自の展開を遂げた様相を呈しているのかもしれない。

15、 いはや物語 写本 絵巻 三軸 赤二〇四・九

室町時代成立の御伽草子。継子もの。「岩屋の草紙」とも称される。平安時代にも『いはや』という物語があり、散逸したその改作か。父の赴任に伴われて船で九州に下る姫が、継母の悪だくみによつて海中の岩の上に捨てられるものの、漁師夫婦に助けられ、岩屋で養われる。この姫君を伊予の湯治から帰る途上の二位の中将が見出して都に連れ帰り、妻とする。姫は父とも再会し、関白の妻として繁栄するという物語。当本は、天地（紙の縦の長さ）が三一・八cmの大型の奈良絵の絵巻で、寛文（一六六一〜一六七三）頃の制作と見なされる。この作品の標準的な本文をそなえているとされ、松本隆信編『室町時代物語大成 補遺一』に収録されている。





16、 四十二ものあらしひ 絵巻

二軸 赤二一〇・八〇

「ものあらしひ」とは、室町期に流行した創作歌合の変形したもので、本作品は、女子が歌の教養や女性としての嗜みを身につけるために編まれた御伽草子である。奈良の帝が、二月の十六日の頃、東宮のもとに行幸したところ、南殿の桜が美しかったことから、春秋の争いに及んだ。『月の夜と雪の朝と』『時雨と春風と』『風になみよる柳と霜にしほるゝ薄と』『うとまるゝ身とあかぬわかれと』という具合に、比べ合わせる四十二の題を設けて、廷臣や女房たちが歌によって判定する。当本は箱書きにより細川幽斎筆と伝わるが、筆跡に幽斎の特徴は認められない。末尾に、壺形印（朱陽刻）があり、「乏終左正」と読める。壺形印は室町期から桃山時代にかけて狩野派に多く用いられたとされるが、今のところこの号を持つ人は未詳である。



みくしげ  
中宮の御方の女房と御匣殿

17、 今昔物語 刊本 三〇冊 個人蔵

古写本は「今昔物語集」と題され、平安時代末期に編まれた説話集三十一巻（ただし巻第八、十八、二十一は欠）で、天竺・震旦（中国）・本朝の三国にわたる一千を超える短小な物語を集成する。長く世に知られなかったが、江戸時代になって書写されるようになった。当本は、前編十五巻十五冊、後編十五巻十五冊からなり、熊本の学者井澤長秀（号は蟠龍、一六六八—一七三〇年）が校訂し、注を加え絵入り本として享保六（一七二一）年に京都の柳枝軒より刊行したもの。ただし、載録するのは本朝の説話の一部で、しかも説話本文を簡略にし、一方で古事談などから説話を加えている。

18、 平家物語 写本 袋綴 三十六冊 二二五・三〇・甲、乙

平家の繁栄から滅亡までを描く軍記物語。この物語の作者、成立時期等は明らかでなく、南北朝時代にさまたまの説が取りざたされた。十三世紀末頃には盲目の琵琶法師が語っているとする資料もあり、多くの人の参加によって成長したと考えられている。多種多様な本が作られ、本によって巻や章段の立て方、本文が異なるのもそうした事情に



卷之六・小督



よる。当本は十二巻の各巻を三冊に分ける。絵入り。本文は葉子十行本と称される系統に属することが確認され、絵は俯瞰的な構図を多用し、これらの点で奈良絵本の平家物語としては特異であると見なされている。江戸時代前期の制作。

19、太平記 写本 列帖装 八十三帖 一〇五・七

鎌倉幕府の滅亡から南北朝時代の動乱を描く軍記物語、四十巻。数段階にわたる書き継ぎと改訂が施されつつ、一三七〇年代には一応成立したと考えられている。当本は江戸時代前期に制作された奈良絵本。目録に一帖を宛て、一卷を二帖に分け、「剣巻」二帖がそなわる。冊数とい、一二五箇所という絵の数といい最大の奈良絵本と目されている。筆跡から筆者は朝倉重賢、本文は寛文（一六六一）一六七三二年間に刊行された平仮名整版本に基づいていると見なされている。



巻第七・千早城

20、鴉鷺合戦物語 刊本 一冊 熊本大学附属図書館蔵

御伽草子。擬人化された鴉と鷺の合戦を軍記物語風に描く。室町時代一流の文化人であった一条兼良（かねよし）とも。一四〇二—一四八一年の作とも伝えられる。鴉が鷺の娘に求婚したことをきっかけとして、一族および他の鳥たちを巻き込んで合戦に及び、敗北した鴉が出家する物語を軸に、平家物語などの文体を模し、これに仏教・儒学・和学の知識を盛り込む。当本は寛永（一六二四）一六四三期の古活字本で稀少。元来は三冊を台冊する。第五高等学校旧蔵書。

第29回 熊本大学附属図書館貴重資料展  
解説目録

永青文庫資料にたどる

# 物語史と絵

森 正人・徳岡 涼 編著

平成25年10月刊

熊本大学附属図書館・文学部附属永青文庫研究センター

本目録の無断転載・複製を禁ずる